

若松城下における土蔵の意匠に関する研究

インテリア 柴崎ゼミ
A2201026 本間 茉友里

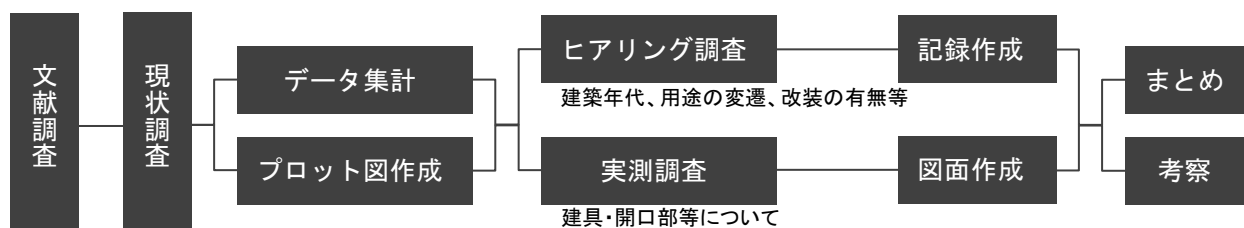
【研究背景・目的】

会津若松市内には土蔵が数多く残されており、また、その意匠(デザイン)は多種多様である。しかし、その知名度は低く、会津若松市の土蔵に関する詳細な資料は残されていない。また、老朽化や低耐震性、高額な維持費等の問題から数が減少しつつあるのが現状である。全国的にも土蔵に関する研究事例は少なく、後世に伝えていくには不十分であるため、記録として残す必要があると考えられる。

【研究内容】

全国的に土蔵が盛んに建てられるようになった江戸～明治時代における会津若松市(若松城下)の範囲で、土蔵の所在地・用途・外観の意匠等について現状を調査する。その後、武家地・町人地・寺社地等でそれぞれヒアリング・実測調査を行い、地域による意匠の違いを分析する。また、会津若松市以外の土蔵について文献等で調査・比較することで、会津若松市の土蔵の特徴を明らかにする。

【研究方法】



【基礎知識】

◆ 「若松城下」について

至徳元年(1384)、葦名直盛が館を築き、東黒川城と称したのが城下町としての始まりで、今の若松の前身である。この黒川城下はあまりにも狭く、武士と商・職人たちは軒を接して連なるという混然とした町であったため、天正18年(1590)に松坂より移った蒲生氏郷が文禄元年(1592)から本格的に新たな町づくりを開始した。これによって郭内の町や寺院は諏訪神社と菩提寺の興徳寺を除いて郭外に移された。(郭内は武家地、郭外は町人地・寺社地等という町割り徹底された。)

かくして文禄2年(1593)新しく誕生したのが「若松城下」である。



◆ 土蔵について

外壁を土壁として漆喰などで仕上げられるもの。煉瓦やモルタルで造られたものもある。倉庫・保管庫、座敷蔵(住居)、店蔵(店舗兼住居)、店舗兼保管庫、酒蔵など用途は多彩である。

壁厚は30cm以上あることが多く、開口部の外戸なども土戸とすることがある。そのため、耐火性・断熱性に優れているが、完成までに何年もかかる・地震に弱いなどといった欠点もある。江戸時代以降、火災や盗難防止のために盛んに建てられ、後に裕福さの象徴ともなった。



【調査結果】

◆ 文献調査

戊辰戦争で城下の3分の2が焼土と化した。これにより、武家屋敷はほとんど全焼してしまった。現存するのは1軒のみで、以前はその敷地内に土蔵もあったそうだが、取り壊して駐車場にしてしまったとのことだった。従って、現在、武家地に残っている土蔵は全て戦後に建てられたものであるということが分かった。

また、土蔵造りの神社は田中稲荷神社のみで、現在、土蔵造りの社は全国でもこの社と京都にある社の2つだけである。度々の焼失により、1899年(明治32年)に火事に強い土蔵造りに建て替えられた。土蔵造りの寺も度重なる火災等に悩まされ、土蔵造りで再建したという事例が多いようである。



◆ 現状調査

若松城下の範囲で土蔵の用途や外観の意匠等について調査を行い、所在地を地図にプロットした。

- ・ 総数 510棟(9/28時点)

この中には東日本大震災の被害を受け、解体されてしまったものも含まれている。未調査の地域もあるが武家地なので、総数としては大きく変わらないと思われる。

- ・ 外観の意匠

外壁は漆喰のものがほとんどであった。黒漆喰の土蔵も含まれており、店舗に使われている例が多かったように思う。老朽化で白壁が剥がれ落ちたと思われる部分にはトタンやペンキなどで補修されていた。また、数は少ないがモルタルや煉瓦で造られている土蔵もあった。

屋根形状・素材は塗籠屋根・瓦葺きが多かったが、置屋根・金属屋根葺きも少なくなかった。一般的に、置屋根は蔵の中の温湿度を一定に保つ・通気性が良い・メンテナンスがしやすいといった利点がある。また、屋根が燃えたら落としてしまい、蔵の本体が残るように工夫されている。一説では、屋根を落とす場所がある場合は置屋根を、無い場合は塗籠屋根を造るということがあったようだ。



店舗以外は道路から見えにくい位置に土蔵が配置されているが多かった。また、温湿度が一定であるということに適した漆器屋や造酒屋、味噌醤油屋は土蔵造りがほとんどであった。

◆ ヒアリング調査

所有者の方に「蔵のデザインに関するアンケート」とインタビューに回答して頂いた。

意匠については「店舗なので細かく柱が建てられていない」「部屋から庭が眺められるようにした(座敷蔵)」といったことはあるが、装飾的な部分は「施工者が決めたので分からない」という回答が多かった。また、防火については「軒先は燃えても良いように、内側にもう1枚トタン戸を設けている(店舗)」という工夫がされていた。中には「土戸を閉めたら、隙間に生味噌を塗る」という驚きの回答もあった。



他にも、「戊辰戦争で長州藩の屯所として使用され、大黒柱に試し切りの跡が残っている」「白虎隊の生き残りの方が泊まりがけで襖に書や絵を書いていった」等の面白いお話も聞くことができた。



◆ 実測調査

建具・開口部等について実測を行った。

【まとめ・考察】

土蔵によって様々な工夫・歴史があることが分かった。用途変更や時代の流れに合わせて改装され、補修を繰り返し、受け継がれてきた土蔵は人々の努力の歴史である。しかし、維持費が高額であることや補修の専門的な知識のある職人が減少しているといった問題もあり、後世に残していくためには更なる努力が必要であると感じた。この研究により、土蔵に少しでも関心を持つ人が増えてくれたら何よりである。